

---

# 生理のいたずき

上月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生理のいたずき

### 【Nコード】

N3298D

### 【作者名】

上月

### 【あらすじ】

「しょう。セックス。それと、子ども作るっ」

以前、人間は水を飲むだけで一生生きることとも可能だというテレビ番組を見た。実際水だけを飲んで暮らしていると主張する、白人系のおじさんがテレビに映って、得意げに水を飲み干しているシーンも、未だにはつきりと覚えている。それが嘘か本当かはさっぱりわからなかったが、それを見たことをきっかけに、わたしはゆっくり変わっていったような気がする。

おえっ、ごほ。トイレの便座のふちをしつかりと掴んで、頭をもたげ、延々と胃液と唾液を吐る。独特のいやな臭いが口臭のようにわたしの口から漂ってきて、またそれに吐き気を覚える。照明が明るすぎて、わずらわしい。ようやく胃の中のを全部吐り終えると、荒く息をつく。ふと便座の中を覗き込んでみると、水は濁っていて、唾液と思われる小さな泡あぶくが浮かんでいた。わたしはレバーに手をかけて、トイレを流す。トイレと隣接している洗面所にふらふらと向かうと、冷たい水でさっと口元を洗って口内をゆすぐ。がんがんと痛んで重かった頭が、自然と軽くなっていくのがわかった。

拒食と過食をここ一年間ずっと繰り返しているわたしを心配した友人が、一度脅しをかけるように、「胃液ばかり吐いてたら、いつか歯が溶けてぼろぼろになっちゃうからね」と忠告したことがあった。その忠告聞いても、わたしは「ふうん」としか相槌を打てず、実際歯が溶けるということ自体、特別何の抵抗も持ってなかった。ただなんとなく、歯がなくなってしまったら、どうなるのだろう、死んでしまうのかな、などと本気でわたしを心配しているような友人を眺めながらぼんやりと考えていただけだった。

生理は一ヶ月に一度、一週間くらいの長さでやってくる。そして、なぜかその時期に限って、わたしは無性にセックスがしたくなる。もちろん、生理中の女と体を重ねるなんていう変態じみた性癖を持ち合わせてない彼氏の知己ともぎは、いくらわたしが誘っても、猫撫で声

でわたしを宥めながら、丁寧に断るのだが。でも、その生理が、つい二ヶ月ほど前からぱったりと来なくなってしまった。いちいちこまめに手入れをしなくて済むから楽といえば楽なのだが、なんとなく、何か物足りない気がして、毎日むずむずとしている。それをこの前知己に相談してみると、妊娠したんじゃないかと言われ笑われ、あまりの楽観さに逆上して、彼の顔を思いつきり引つ叩いてしまった。

掃除機の音が部屋中に響く。せつせと、まるで専業主夫のように忙しく掃除機をかけている知己の姿が、なんだか滑稽に見えて、わたしは思わず笑ってしまった。

「知己」

わたしの呼び声に気付いたのか、掃除機のスイッチをオフにすると、知己は掃除機を片手に持ったままわたしの方を見た。

「なに」

「わたしが死んだらさあ、知己はどうする」

ソファに深く凭れかかりながら、目の前のテーブルに置かれていた、赤色の鋏はさみを手取る。刃先は丸く触れても滑らかな曲線を描くだけ。極力けが人を減らそうという魂胆なのだろう。わたしはその鋏に指を掛けて、鋏の刃を開いたり閉じたりしながらそう訊いた。

わたしの突然の問いかけに、ひどく困惑しているようにも見えたが、彼は小さく笑って、「考えられないね」とだけ言うてから、また掃除機をかけた。なによお、それ。と知己の返答に納得いかないわたしは、ぶつぶつと憤りの声を上げる。けれどその声は掃除機の上げる唸り声によって、いとも簡単に掻き消されてしまった。

「ねえねえ」

掃除を一通り終えて、わたしの隣で寛ぐ知己に、寄り掛かりながら、わたしは甘えた声を出す。

「今度はなに」

わずらわしそうにため息をつきながらも、必ず知己はわたしを甘

やかすように髪を撫でてくれる。本人も、こうして女の子の髪を触るのは好きらしく、付き合った当初も確か、わたしの髪を撫でながらこの行為が一番好きなのだと教えてくれた。

「こなわたしのどこが好きなの」

「手のかかるところ」

「何それ。わたし犬みたいじゃん」

「犬っていうよりは猫だよね、智沙ちさは」

「智沙ちゃんは猫がお嫌いなんですよう」

「知ってるから」

「あ、ひどおい。っていうか真面目に答えてよね」

「真面目だってば」

「ふうん」

唇を突き出してそっぽを向くと、知己は苦笑しながらまたわたしの髪を撫でてきた。

「ねえねえ」

「なに」

「次の生理って、いつくると思う」

「さあ。子供が産まれてから、なんじゃない」

「できるわけないって」

「俺はほしいのに」

妊婦とは程遠い、へこみすぎたわたしの腹に知己の手が触れる。わたしも腹に視線を落とすと、知己の手の上に自分の手を重ねた。息を吸うごとに腹はちよつと膨れるだけで、そこに生命が宿っているようには到底思えない。それどころか、本当にこのへこんだ腹の中に、生命を宿すための子宮がちゃんと備わっているのかさえ疑わしい。「でも、もし仮に子供ができたとして」

「うん」

「奇形児とか障害とか持っていたりしたらどうすんの」

「育児放棄」

「それ本気？」

「冗談だよ。だって智沙の子供でしょ。大事にするに決まってるじゃん」

ふと、部屋を見渡してみると、部屋はきちんと片付けられ、先ほどの掃除のお陰もあってか、潔癖症が主の部屋のようにきれいだっただ。そういえば、知己は暇を理由にわたしの住むアパートに来ては、無駄に部屋を掃除したがる。ついでに体も求めてくるのだが、生理じゃないときはとことん気が向かないし、体自身も濡れてくれないので適当に断る。面倒くさがって簡単な人間関係ですら疎かにする存在価値すら危ういわたしのどこが彼はいいのだろうか、たまに本気で考えるときがある。そして、それを本人に訊いてみても、信憑性のある言葉は何一つ返ってこないし、わたし自身もまだ完全に彼を信用していないこともあって、自分の満たされる答えはまだ一度も返ってきたことがない。

「どうして」

「理由なんてないよ。本能的に、そう大事にしたいって思っちゃうんだし。だから、そこは言葉にできないよ」

「だめなやつ」

「うっせえ」わたしの皮肉に知己はわたしの頬を引っ張ってから、

「あ」と何か思いついたように声を出した。

「なに、どうしたの」

「お前、もしかしたら本当に妊娠してるかもしれないよ」

「はあ？ 普通、妊娠したらつわりとかくるでしょうが」

わたしはあまりにも突発的な彼の言葉に目を見開く。

「だから、智沙、ここんところずっと拒食して吐いてばっかだろ？」

そのせいで気付いてないだけかもしれないじゃん」

「ああ、それはないって。セックスするときちゃんと避妊してるじゃん。それにピルもちゃんと飲んでるし」

わたしの言葉に納得したのか、知己は肩を落とすと、段々とフェイドアウトしていく声で「そっか、そうだよな」とだけ言った。

「でも、智沙。もし本当に妊娠してたら、お前、このままじゃ赤ち

やん殺すことになるんだからね。食うもんちゃんと食つとかないと、後々後悔すんの、智沙だから」

「はいはい」

適当に返事しながら、もし今この体の中に赤ちゃんがいるとしたら、わたしの脂肪も内臓も、胃の中にある微小な栄養すら全部吸収して、わたしはミイラのようにからからに萎んで干からびていいから、腹だけは大きくなって、赤ちゃんもわたしの命を栄養にして大きく育つて、産まれてくれればいいのにと思った。

知己がいなくなつてからの最初の数時間は、この上なく虚しい空間がわたしを包み込む。明りも何も点けないで、相変わらずソファに座り込んだまま、膝を抱えてぼんやりと視点を定めずに真っ直ぐを見つめる。何も入っていないはずの胃が活発に動き、その不快感がまた喉までこみ上げてきて、わたしは堰を切つたようにトイレへと駆け込んだ。うえっ、げはっ、ごほ。唸り声をあげながら、ひたすらこみ上げてきた液体を吐き出す。そして、ようやく、胃が痛んでるわけではないことに気が付いた。はっとして腹をなでてみると、胃よりも下にある、けれども下腹部より少々上の部分が痛い。この痛みには覚えがあつた。もう随分長い間忘れていたから、思い出せなかつただけで。よくよく考えてみれば、今日の朝から腰も痛かつた気がする。やっぱり、妊娠はしてなかつたのか。心の底ではわたしも何となく期待していた答えが、あっさりと言切られ、どこか残念がつてる自分に気が付いて、ああ、やっぱりな、と意味もなく納得してしまった。死んじやだめなんだ、ということも、よくわからないが、直感的に感じた。まだいない子どものために。

わたしは口をゆすぐのも忘れて携帯電話を取りに部屋に戻ると、電話帳を開いて知己に電話をかけた。しばらく機械音が鳴ってから、さっきまで聞いていた知己の声が、半ば驚いたような色を含んで、わたしの耳に入ってきた。

「どうしたの。智沙から電話なんて珍しい」

「お粥」

「え？」

「今すぐお粥つくりに来て」

「何、風邪でもひいた？」

「ちがう。なんか、食べたくなくなって。でも、家になんもないし。ご飯作れないし。買う気もないし。それに最初から重いもん食べたくないから」

「はいはい。んじゃ材料揃えて今からそっち行くよ」

「あとね」

「あと、何」

「セックス」

「はあ？」

「しよう。セックス。それと、子ども作ろう」

わたしはそれだけ言って、乱暴に電話を切った。

へこんだ腹を撫でながら、この皮膚と脂肪の奥にある子宮が妙にいとしくてたまらず、わたしはそのままずっと、腹を撫でつづけた。

ああ、そうだ。

次の生理はあと何日でくるんだろう。

……了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3298d/>

---

生理のいたずき

2010年10月8日15時56分発行